

序

八木 聡明*

聴覚障害は視覚障害と並んで、極めて障害者の多い感覚器障害である。視覚障害のうち罹患率が高く、一般にも広く認知されている疾患に白内障がある。白内障は、手術によって劇的にその視力が改善されることはよく知られている。それに比して、聴覚障害はなかなか改善しないといわれるし、そのように思われている。耳疾患で白内障に当たるものは耳硬化症と思われるが、その手術による聴力改善はやはり劇的である。しかし、耳硬化症の頻度は白内障に比べて圧倒的に低いので、一般受けしないのも確かである。

一方、白内障のようなレンズ障害と異なった網膜疾患による視覚障害には、現在のところ眼科的に有効な治療手段はあまりないようである。それに比して、網膜疾患に対応するような高度感音難聴に対して、われわれは人工内耳や聴性脳幹インプラントのような聴力改善の手段を有している。人工眼はまだ研究の緒に就いたばかりのようである。

聴力改善は困難な課題ではあるが、それほど悲観的になることもない。希望をもって先に進むよう心がけたい。そのためには、現状を十分理解していなければならない。成書にある手術法などの記事は、しばしば、それが発行されたときには既に古くなっている。この増刊号では、最近の進歩も含みながら、臨床実地の観点からはすぐ役立つ情報を加えてもらうように企画した。聴力改善手術は、時代とともにその意味にも広がりが出てきている。以前は聴力改善手術といえば、中耳手術を指していた。しかし、現在は内耳へ、そして脳幹、さらに大脳へとその手術対象が広がっている。むろん、中耳手術でも人工中耳というような以前と異なった範疇の手術が加わったし、どの範疇に入れるのが適切か難しいところであるが、BAHA（埋め込み型骨導補聴器）手術も行われるようになってきている。人工内耳や聴性脳幹インプラントによって、聴覚に関する新しい情報も得られるようになってきている。今後、大脳へのインプラントがもし行われるようになれば、聴覚に関するさらに新しい情報が得られる可能性は大であろう。聴力改善手術は、単に聴力をよくするというだけでなくとどまらず、聴覚の生理学や心理学の進歩にも大いに役立つものと理解している。